

【 특 집 】

## 日本人満洲移民の生きられた世界

— その記憶と経験 —

蘭信三\*

### 目 次

1. はじめに
2. 20世紀前半期の日本人の国際移動と満洲移民
  - 1) 20世紀前半期の日本人の国際移民史
  - 2) 20世紀前半期の日本人の植民史
  - 3) 北米南米移民と勢力圏への植民の連関性
3. 満洲への日本人の移住
  - 1) 農村経済更生運動と満洲農業移民事業の展開
  - 2) 満洲農業移民事業の概要
  - 3) 満洲農業移民事業に付与されたその性格
  - 4) 様々に投影される満洲移民
  - 5) モデルとしての分村移民・分郷移民
4. 満洲での開拓生活
  - 1) 開拓地での生活
  - 2) 開拓生活の困難
  - 3) 近代家族の誕生、植民地での近代化
  - 4) 階級関係と民族関係と
  - 5) 開拓生活の成否の分かれ目
  - 6) 植民地都市生活者との比較
5. 敗戦体験とその後のライフコース—引揚げと「中国残留」と
  - 1) 1945年8月9日以降の日々
  - 2) 敗戦から引揚げまでの難民期
  - 3) 集団引揚げか、中国残留か

\* 日本 上智大学 教授

6. 想起される「満洲」、想起される「日本」
  - 1) 集団引揚者の戦後経験
  - 2) 中国残留者の戦後経験
7. 記憶の語りを聞き取ることの意味
  - 1) 経験を知ること
  - 2) 記憶の語られ方
8. 結びにかえて
  - 1) 戦後日本社会の「語り」の磁場
  - 2) 「否定された満洲」に係わった体験の解釈
  - 3) ふたつの「記憶の裂け目」
  - 4) おわりに

---

## Abstract

---

This paper discusses the lives and experiences that Japanese immigrants to Manchuria underwent during the 20th century. From 1932 to 1945, some 270,000 Japanese immigrants were sent to Manchuria for the purpose of supporting the Japanese army stationed. Out of them, 80,000 died during six months after August 9th 1945, 170,000 repatriated to Japan from May 1946 to 1949, and about 10,000 remained in China even after 1958. Accordingly, their lives were complicated and multi-facet, as settlers in 'Manchukuo', as refugees during the war, as repatriates, and as Japanese people who were left-behind in China. Since their experiences have been suppressed in societies both in Japan and China in the post-war period, they have never alluded to these experiences to outside. Manchukuo being formally a 'puppet regime' for China and Japan, those Japanese people who were left behind in China had carefully interacted with Chinese, and repatriates in Japan, with Japanese. The main reason for this is that their lives and experiences in 'Manchukuo' have been denied as a part of 'dark' history of a 'puppet regime'. So, their memory was struggling with dominant histories narrated in Japan and China. That is the 'politics of memory'.

Keyword: memory, politics of memory, experience, Japanese immigrants to Manchuria, repatriation, Japanese left-behind in Chin

---

## 1. はじめに

本報告は、日本人満洲移民の戦前戦後を通じた生活世界、すなわちその語られる満洲体験と戦後体験に関する考察をおこなうことを目的としています。

本報告の内容は、大体以下のようです。まず、(1)日本人満洲移民の生活世界の考察です。それは、日本人満洲移民の渡満の経緯とその背景、「満洲」における生活実態の紹介、敗戦後の難民期とその後の集団引揚げ、中国残留について、それぞれの生活実態を明らかにすることです。ついで、(2)想起される「満洲」と「日本」に関する考察を行います。具体的には、(a)集団引揚げ者の想起される「満洲」と(b)中国残留者の想起される「日本」です。前者は「1945年8月9日ソ連参戦後の惨劇」と「満洲はよかった」という、悲惨さとノスタルジアの光と陰の意味についての考察です。また、後者は「残留」の経緯と祖国へ訴えられる語り、とりわけそのなかでクローズアップされる日本人集団引揚げの際に残留した経緯を説明する際に語られる「母の物語」と「家族の物語」の意味についての考察を主に行います。

さて、本報告の研究方法は、いわゆる実証史的な方法と視点ではなく、今日の視点から体験者によって想起され、語られる経験を題材として、それらに関する歴史社会的な考察を行うことです。想起され、語られる体験は、個人によって体験されたものですから、いわゆる「客観的」なものではありません。そこには、時代状況や、マスター・ナラティブ(社会での主要な語り)、モデル・ストーリー(集団で語られる主要な語り)など様々な規定要因があり、個人の語り体験が「そのまま」語っているとは想定していません。むしろ、語り手の想起された過去の体験への語りか、マスター・ナラティブやモデル・ストーリーとどのように違っているのか、同じなのかによって、個人の語られた体験を解釈していくことに主眼をおくという方法です。

また、同時に、これは1960年代以降の「新しい歴史学」の流れを汲んだ「下から

の歴史」であり、個人の生きられた歴史(小文字の歴史)から社会の主要な歴史(大文字の歴史)を問い直す研究潮流のなかにあるものでもあります。小文字の歴史には意外なものがあります。例えば、敗戦前後の逃避行のなかで多大な犠牲を払いますが、にもかかわらず彼らはよく「満洲はよかった」と語ります。そして、そのような語りを戦後日本社会の中で長らく抑圧されてきたということです。これをどのように理解するか、これが本報告の主要な課題でもあります。

もう少し大上段に構えれば、本報告は以下の3点を課題としています。まず、(1)日本人満洲移民にとっての満洲移住によって生じた彼らの人生をどのように解釈しているのか、つまり満洲移民とは彼らにとってどのような意味があったのかという課題です。ついで、(2)日本人満洲移民とは日本社会にとってどのような意味をもっていたのかについての考察です。最後に、(3)日本人満洲移民とは、東アジア社会にとってどのような意味を持つのかについて考察することです。本報告では、(1)を中心にしながら、(2)、(3)を視野に入れつつ本報告をすすめていきたいと思えます。

## 2. 20世紀前半期の日本人の国際移動と満洲移民

### 1) 20世紀前半期の日本人の国際移民史

近現代日本史のなかで人の国際移動がどのように展開され、満洲移民がどのように展開されたかを簡単に見ましょう。現在、日本は215万人以上の外国籍のひとを受け入れているいわば「移民受け入れ国」となっていますが、つい半世紀ほど前までは主要な「移民送出国」のひとつでした。1868年の「元年組」、1882年以降のいわゆるハワイへの移民をはじめとして、アメリカ・カナダという北米への移民、そして1908年以降のブラジル、ペルー、アルゼンチンなど南米への移民等々、相当数

の移民を送出していました。これらの移民は、19世紀末からの日本帝国の形成との関連よりも、日本国内の過剰人口問題と世界的な労働力移動の流れの一環で生じた移民でした。すなわち、これは日本人の国際移民史(history of Japanese transnational immigration)として捉えることが出来ます。

広島、福岡、熊本、佐賀、鹿児島、和歌山、そして遅れて移民送出に参入した沖縄など西日本地域から主として輩出されましたが、貧農層が中心となりつつも、そのなかには新しい世界へと飛躍を目指す中農層の子弟、新たな理想を目指す都市インテリ層も含まれていたことは忘れてなりません。北米、南米での新世界では、プランテーション農業の担い手として期待されての移住でしたが、かなりのひとは都市へと移り住み、第二次世界大戦下の「敵性外国人」というレッテルによる迫害にもかかわらず、戦後しばらくすると、子弟の高等教育就学によって、それぞれのホスト社会で「モデル・マイリティ」としてかなりの程度の成功を収めていきました。

## 2) 20世紀前半期の日本人の植民史

他方で、アジアへの移民がありました。それは(a)19世紀半ば以降のウラジオストックや上海など西欧列強の都市開発・植民地都市開発に伴う移住と、(b)20世紀前半の日本帝国形成期・膨張期の植民地や勢力圏への移住、そしてそれとは直接関係のないところでの移住である(c)フィリピン(ダバオ移民)やインドシナやニューカレドニアなどへの移民がありました。本稿では、(b)を中心に取りあげます。

周知のように、台湾への移民(1895年より植民地化)、樺太への移民(1905年より日本領)、関東州への移民(1907年より租借地化)、朝鮮への移民(1910年併合)、南洋への移民(1919年委任統治領化)、そして満洲への移民が日本帝国の形成期・膨張期に生じた移民でした。これらの移民は、上述の過剰人口問題と国際労働力移動とが結びついた移民というよりも、帝国の植民地支配に結びついた「植民

(settler)」であったことはいうまでもありません。

それは、国内の過剰人口問題対策でもありましたが、むしろ植民地での日本の利害を拡げる植民であり、さらには植民地に日本的秩序を植え付け、治安維持を担うひとたちでもありました。大まかに言えば、日本帝国の利害と植民者の利害はほぼ合致していました。植民地支配の日本の特徴は、後発の植民地帝国として英米仏などの欧米列強に追いつくために、地理的近接性もあいまって、植民地の産業水準を本土化並、「日本化」していくという方針でした。

これらの植民者は農村への入植者というよりも、植民地官僚、鉄道などインフラ産業や重化学工業などのテクノクラートや、植民地権益と結びつく都市での小売店主などの中小商工業経営者としての移住者が主であり、いわゆる植民地の近代化、産業開発の担い手としての植民者であったのです。この人たちは、近代化される植民地でのテクノクラート、植民地権益とむすびついた中小商工業者、近代化されつつある植民地の高等教育の優先的な進学者、近代的生活の消費者として、植民地での特権を享受したのはいうまでもありません。

### 3) 北米南米移民と勢力圏への植民の連関性

では、南北アメリカへの移民と帝国の勢力圏への植民者はどのような関係にあったのかといえば、地域的な違いも少なく、高学歴のテクノクラート層を除けば、地域的には西日本、階層的にも中の下あたりの農民層であり、20世紀前半の南北アメリカ大陸への移民と帝国の植民地へ移住していった地域も階層もそれほど大きな違いはないということが最近わかりつつあります(木村健二)。

しかしながら、移民先の社会における日本人の地位には大きな違いがあったことは明らかです。その結果、北米には約37万人、南米には約19万人と双方合わせて約56万人の移民がありましたが、他方、植民地や勢力圏への移住は300万をゆ

うに超えておりました。やはり、日本帝国の膨張に伴って北米南米大陸への移民から帝国の勢力圏への植民へとシフトしていったことは言うまでもありません。その典型的な流れを、「ブラジル移民から満洲移民へ」と表現されることがあります。周知のように、「満洲国」は1932年3月1日に「建国」されました。ほぼ同時期の1934年にブラジルでは移民制限法が施行され、最盛期には年2万人をもこえた日本人のブラジルへの移民の行く先が模索され、結果として満洲移民がその受け皿となったというストーリーです。満洲移民は、従来の勢力圏への日本人植民者がほぼ植民地都市への移住であったのに対し、ブラジル移民と同じ農業移民である点でこのストーリーが強調される所以でもありましょうが。

### 3. 満洲への日本人の移住

#### 1) 農村経済更生運動と満洲農業移民事業の展開

日本人満洲農業移民の発端は、1932年3月1日の「満洲国」の建国にあったことは言うに及びません。それによって、それ以前20年代から日中間の火種となっていた土地問題が解決され、日本人農民の入植を可能としました。むろん、これによって日本人満洲農業移民事業がすぐに展開したわけではありませんが、満洲におけるその下地が整ったわけです。

反満抗日勢力の反抗に悩む治安当局(関東軍及び満洲国)が、反満抗日ゲリラが潜む北部東部満洲に日本人農民を入植させ、当該地域の治安と日本的秩序を確保したいというねらいがこの事業の根底にあったのです。しかし、経済合理的見地から、生活水準が低くコスト面で競争力がありかつ在来農法に長けている中国人農民や、農業技術力に長ける朝鮮人農民との競争力に著しく劣る日本人農民を

入植させるのは難しいという議論が当初政府中枢で根強くありました。ですから、初期の5年間は試験移民という位置づけでスタートさせました。当時ブラジルに2万人の移民が送出されていた時に、500名の試験移民しか出せなかったのを見ても、その扱いがわかるというものです。

しかし、1936年の二・二六事件で事態は大きく変化しました。「満洲移民は可能か」という議論から「満洲移民はなさねばならない」という議論へと転換し、しかも1934年にブラジル移民も移民制限法で多数の移民送出が難しくなったことも追い風となって、農村の過剰人口の輩出先として満洲が大きくクローズアップされたわけです。

折からの世界大恐慌(1929年)で日本農村は大不況に襲われ(1930年～)、おまけに冷害が数度にわたって東北地方を襲い、負債にあえぐ農村の立て直しに農林省によって「農村経済更生運動」が1932年より実施されていました。当初は試験移民としての満洲移民と農村経済更生運動は別々に行われていましたが、二・二六事件によって、その経済合理性による判断という「障壁」が取り除かれ、満洲移民事業は国策化され、同時に農村経済更生運動とが結びつけられました。これは決定的なことで、満洲移民事業は、国策化され試験移民から本格移民へと大きく展開されていったのです。具体的には、ひろく全国の農村に行きわたっている経済更生運動の一環として満洲移民事業が位置づけられ、農村救済策・補助金と結びついて大きく展開していったのです。

農村経済更生運動も満洲農業移民事業も1932年から始まりましたが、農村経済更生運動は農業経営や農家生活の合理化や節約などの経済合理的な努力によって農村の建て直しをねらいましたが農村の苦境はなかなか打開されず、二・二六事件後に軍部ファシズムが強化されたす1937年になって、いよいよ両者が結びついたわけです。それに、1939年には満洲開拓の基本政策である「満洲開拓政策基本要綱」が策定され、さらには満洲拓殖公社をはじめとする関係機関も整備さ

れ、満洲農業移民事業はシステム化され、いよいよ本格化されていくわけです。

## 2) 満洲農業移民事業の概要

以上を要約しますと、試験移民期(1932年－36年)のそれは「満洲国の建国」(1932年)によって開始されましたが、反対論が強く文字通り試験的に行われていました。しかし、「二・二六事件」(1936年)を契機として、翌年に七大国策化され、本格移民期(37年－41年)となりました。1939年には満洲開拓政策基本要綱が策定され、いよいよ本格化されました。しかし、皮肉にも過剰人口問題は日中戦争の拡大によって解決され、戦時景気のなかでむしろ労働力不足が浮上してきます。若者の徴兵、それを埋めるための女性の労働力化、戦時体制への経済統制、その結果植民地労働者の募集、朝鮮人や中国人の強制連行へとエスカレーとしていきます。当然ながら、そのようななか満洲への農業移民の送出は次第に難しくなってきました。

そして、1941年12月8日の真珠湾攻撃を端緒とする太平洋戦争によって事態は泥沼化していきます。翌年のミッドウエー海戦での敗北から帝国崩壊へと進み、満洲農業移民事業は一気に崩壊期へとなるのです。七大国策として「20ヶ年間100万戸計画」(500万人計画)が打ち出されましたが現実には遠く及ばず、13年間で27万人の送出が見られたのみでした。しかも、後半は満蒙開拓青少年義勇軍によってほぼ半分が補充されていました。北米や南米への移民が送出期間は倍ほどでしたが送出者数がその倍ほどの約56万人であったことと比較しても、国策として万全の体制をとられていたことを考慮すると、その事業遂行が大変難しかったことをよく表しています。

### 3) 滿洲農業移民事業に付与されたその性格

さてここで、滿洲農業移民事業に付与されたその性格を振り返っていきましょう。先ほど紹介しましたように、北米南米移民は農業労働者としての移民でしたが、帝国勢力圏への移民はほとんどが官僚や重化学工業のテクノクラート、都市の中小商工業者としての植民者でした。ですが、滿洲移民は農村への農業移民として送出されたことに大きな特徴があります。

そもそも日本人滿洲移民には、ロシアのコサック兵や明治期の北海道への屯田兵のような役割が本来的に期待されていました。すなわち、日本人滿洲農業移民事業は滿洲国建国をうけて、関東軍によって企画され、二・二六事件によって国策化されたことから明らかです。しかも、反満抗日ゲリラ地区への大量の入植に象徴されるように、滿洲国の治安維持、対ソ連への防衛、軍隊を支える兵站基地的な役割が主に担わされたものでした。他方で、急増する都市の食糧基地として都市周辺へ入植させられた開拓団や総力戦下の食糧増産の要請のもと主に南満への大規模な入植もあったことは忘れてはなりません。

当初、滿洲農業移民は、日本内地では、日本農村の不況対策、土地不足に泣く日本人農民への福音、失業者による社会不安を解消するためのものとして、提唱されていました。しかし、上に見ましたように、それらは初期に国内向けに言われたものの、それらの問題は戦線の拡大の中で解消され、むしろ農村は労働力不足に陥ってしまいました。そのことによって、滿洲の治安対策としての農業移民という性格が浮き彫りになっていったわけです。滿洲における重化学工業等が産業開発を主眼としていたことは対照的に、日本人農業移民は、日本の軍事支配や土地侵略を体現する植民者としての性格を色濃くしていったのです。

#### 4) 様々に投影される満洲移民

このように、日本人満洲移民は中国人農民や朝鮮人農民から見たら日本の軍事支配や土地侵略を体現する植民者としての色合いが強かったです。しかし、日本人移民本人たちにとっては、満洲農業移民として満洲に渡ることは様々な動機や夢が投影されていました。

1980年代に元満洲移民に満洲へ移住した動機について調べたことがありますが、それはじつに多様でした。たとえば、経済的に苦しかったから、内地の人間関係から逃れるため、役場・県庁・等に進められたから、徴兵検査不合格だったので社会的な名誉を回復するため、結婚や家族についていってという消極的なものが片方にありました。しかし他方で、独立(自立)したかった、広い土地で農業がしたかった、満洲に憧れて、外国に憧れて、お国の役に立ちたかった、等々があげられました。

その調査から、満洲移民は様々にひとびとの思いや社会の動きが投影されているものと判断しました。たとえば、満洲事変後(1931年)の社会で一種のブームようになった「満洲熱」によって、農村恐慌下で閉塞している日常からの逃避であったり、それだけでなく将来への夢や野望や希望であったり、青少年層が主でありましたが「理想国家・満洲国」というプロパガンダによる理想としての満洲移民であったり、国策としてのそれであったり、という多様なものがあげられました。これらは、何よりも、国策移民としての側面が大きかったといえましょう。国策であるからこそ、「お国のために」と満洲に移住したわけですし、理想と希望をそこに見いだしたわけですから。同時に、先に見たように、過剰人口の輩出先としての満洲でもありました。ブラジル移民などで表象された「蒼氓の民」としての棄民とも通底している側面がありました。

初期や中期は希望者を中心に移民団が構成されました。しかし、39年以降総

力戦体制が行きわたり、労働力不足というよりも人手不足が厳しくなると、満洲への移民希望者を待っている、「20ヶ年間100万戸計画」はもちろんのこと、年次計画も達成されません。そこで、当局は、年次計画に沿って各府県に人数を「割り当て」、府県は各市町村に割り当て、町村は部落に割り当て、部落では有力者を中心にして送出候補者をあぶり出していきました。戦時体制の下に当時再編されつつあった農村共同体の共同体規制を使っただけで、まさに「強制としての満洲移民」、あるいは「動員としての満洲移民」でした。それに、総力戦体制下の経済統制によって失業し転業を強いられた転業者たちも満洲移民へと向けられました。たとえば、東京転業開拓団は東京の有名な商店街の中小店主たちの転業によって組織された開拓団でした。

大人たちはこのようにして満洲移民が確保されていきました。しかし、総力戦体制のなか、兵隊の応招や軍需産業への労働力のシフトが重視され、次第に満洲移民希望者は払底し、移民候補者の確保が至難となっていきます。そして、その矛先は少年たちへと向かいました。それが、満蒙開拓青少年義勇軍でした。満洲移民は27万人と言われますが、じつはそのうちの約2割の約5万7千人が1938年に創設された満蒙開拓青少年義勇軍でした。総力戦末期には、成年の兵隊の絶対数が不足し、志願した少年兵によって補充されていきますが、満洲開拓も同様に青少年義勇軍によって補充されていきました。

もともと、満洲開拓団は徴兵を免除されるというかたちで宣伝されていたこともあり徴兵逃れとしての満洲移民もあったことは忘れてはなりません。ところが、後述しますように、1945年8月には「根こそぎ動員」というほとんどの成人男性約4万7千人が招集され、結果として彼らの多くが「シベリア抑留」になったわけですが。

## 5) モデルとしての分村移民・分郷移民

満洲移民は、当時の内地の小さな村程度の300戸で1開拓団として組織されることを標準とされていました。当初は、全国から応募されたひとたちによって組織されていましたが、次第に地縁的結びつきを重視した同県、同郡、同村出身者から組織される開拓団へと向かっていきました。それはせっかく入植しても退団者が後を絶たず、定着率を高めるために地縁的な繋がりを役立てることがあったのです。第5次の開拓団(1936年)でもっとも多数の移民を送出した長野県で単独の開拓団が組織されると、以降は府県単位のそれが主流となりました。また1938年より分村移民が推奨され、長野県大日向村が単独の開拓団を組織して送出すると、このタイプの「分村移民」がモデルとなっていきました。同じく同郡から送出する開拓団を分郷開拓団といって、このタイプの開拓団が一般化していったのです。これは、農村経済更生運動と結びつくことより強く推進されていきました。

先に述べました「割り当て」は、「分村移民」や「分郷移民」の際に大いに効果を発揮されました。というのは、それは母村の経済更生計画として「分村移民」や「分郷移民」による送出移民数が農村経済更生運動による補助金と結びつき、分村移民・分郷という地縁の結びつきによる開拓団(分村)の組織化が、「割り当て」の強化となり、満洲への移住が「強制」されていったわけです。このシステムは、「母村」と「分村」の連携による団員の定着と補充に便利で、内地の母村にも満洲の分村にも一見「合理的」なシステムだったわけですが、それは農村共同体の規制と相俟って、まさに総力戦体制下の「動員」と同じ意味を持っていました。

さて、ここで忘れてならないのは、このように総力戦下の国策によって展開されていた満洲移民も、ハワイ移民からブラジル移民まで通底していた過剰人口問題対策との関係が色濃かったことです。それに加えて、満洲の治安維持と大恐慌から昭和恐慌によって深刻な失業問題や社会主義イデオロギーの浸透などによって影響

された内地社会の社会不安の解消もあったことです。

このように見ますと、満洲移民事業は、「満洲国建国」によって企画された当時と、総力戦下での本格化した時点と、崩壊期とでは、その性格が異なっていくことです。すなわち、試験移民期は屯田兵的な防衛や治安維持の側面と一攫千金的な側面が色濃く、本格期には資格条件が緩和されて「満洲熱」にあおられた幅広い階層のひとたちの希望に満ちた植民と総力戦体制下での動員的な側面が混ざり合い、そして崩壊期には人手不足で移民希望者が激減したため、動員としての「強制」的な側面が色濃くなったということです。

## 4. 満洲での開拓生活

### 1) 開拓地での生活

満洲への日本人農業移民は、上述のように様々の動機と背景をもちながらも、その文脈から、基本的には「帝国主義の尖兵」としての入植でした。それに何よりも、その入植地の6割もが既耕地への入植であり、しかもその土地は関東軍(後には満洲国当局)による不当に低い価格による強制的な買収であり、そこで耕していた中国人農民は辺鄙な土地へと追い払われていきました。当初の案では未耕地への入植と唱われていましたが、結果としては多くが既耕地への入植となりました。日本政府は、満洲移住への補助金を各戸当たり1000円、そして配分された土地は10町歩から20町歩でした。8割の団員は農家の二、三男の若い男性で、内地からめとった新妻との夫婦単位の核家族でした。したがって、年雇いの中国人苦力をひとり雇いながらも、全部の農地を耕すだけの労働力はなく、結局は中国人農民に小作に出すというパターンが一般的でした。もともと、中年の夫婦に青年期の子ど

をも多く持つ大家族の場合は、自分たちで耕作することが出来たようですが。それでも、農繁期にはたくさんの方を雇っての農家経営でしたので、人件費の農家経営に与える負担は相当なものであったようです。地主化とともに雇用の人件費負担が、日本人満洲農業移民農家のおおきな特徴だったのです。

## 2) 開拓生活の困難

役場と農協を兼ねたような役割を果たす開拓団本部を中心に、開拓団は、土地、生活物資はすべて配給で、食うに困ることはなかったようですが、そこはパラダイスではありませんでした。

開拓団での生活は、寒さへの適応や、水の違い、住居の違いなどが大きくて、生活環境の違い(落差)への適応に大変苦労しました。先に述べたように、若い夫婦家族は、労働力も農家経営の経験もなく、満洲での農業経験もまったくないという状況で、農業経営での黒字は望むべくもなかったのです。開拓団によって違いはありますが、その苦しい農業経営を付近の山の山林伐採、農産品加工品の販売、出稼ぎ等で補っていました。もちろん、内地の当時の農家も、農業だけで生活が成り立つ農家は少なく、ほとんどは、農業、農産加工品、手間稼ぎ、出稼ぎ等の組み合わせで生活を営んでいました。ですから、当時の内地での理想としての自作農主義を満洲における開拓団の生活に適用しようとしても、「絵に描いた餅」にすぎなかったのです。

営農と社会的経験に長けた団幹部を中心に、開拓団本部が直接経営する農地を小作に出し、農産品加工品で「成功」した開拓団もあったようですが、ほとんどは農産加工品の販路も持たず、出稼ぎ先も開拓できず、満洲における日本人農業移民の農家としての「成功」は、非常に難しかったようです。

極寒のなか閉ざされた環境になすすべもなく、新たな環境に馴染めずに「屯墾病

」という鬱病のような病気にかかって退団するひとたちも少なくなかったですし、環境の変化で病気にかかったり、事故にあったりと、彼らの生活は生やさしいものではなかったのです。中国人農民や朝鮮人農民の犠牲の上に成り立った開拓団も、入植したひとびとからも多くの犠牲を出していました。内地よりましだと思って移住してきたひとびとには、満洲の開拓地での生活は厳しいものでした。自作農が理想とされましたが、労働力不足、満洲での農業経験の不足などから、満洲に適した農業技術の不足、労働力への賃金の農業経営への圧迫から、結局は多くが自作農を諦め、次第に中国人農民や朝鮮人農民に土地を貸して地主化していきました。

それに、開拓団生活の根底には「治安への不安」がありました。武器を所持しており、指導員のなかには農事指導員などとともに軍事指導員がいたのも大きな特徴でした。満洲国全体を見れば治安対策が浸透し、次第に反満抗日勢力はシベリアや関内へと撤退していき、治安はかなりの程度確保されていました。治安が確保され、同時に移民の大量化のために、試験移民期には軍事訓練を受けた在郷軍人が移民候補資格として必要条件にあげられていましたが、本格移民期にはそれは取り払われ、普通の農民が満洲移民として送出されるようになりました。

### 3) 近代家族の誕生、植民地での近代化

先ほど述べましたように未婚の二三男の入植が主なパターンでしたので、その新妻すなわち「開拓花嫁」の招致は重要な課題でした。多くは出身地に一時帰国して本籍地近くの出身者と見合いをして結婚というのが一般的でしたが、開拓団の未婚男性との結婚候補の養成を目指して「開拓女塾」も開設され、そこから多くが花嫁になっていったわけです。満洲への移住を夢見て「開拓女塾」に自発的に応募するひともありましたが、その目的もよく理解せずに満洲へと渡り、結婚を強いられた場合もありました。

ともあれ、開拓地では舅も姑もない夫婦だけの家族という「近代家族」が誕生しました。これまでの伝統や仕来りから離れた夫婦と幼い子どもによる核家族の生活が営まれ、戦後の日本の夫婦とその子という家族生活を先取りしていました。

本来は、入植地に欠かせない農業指導員や会計指導員や医師や看護婦などは内地からの移住者(雇用者)が大半でしたが、開拓団内で自前の後継者を育成することも期待されていました。国民学校を卒業したひとたちで、ゆとりのある家族の場合には、子どもを農学校や看護学校等に送り出して、資格をとらせて開拓団の指導員や看護婦さんとなった場合もありました。彼ら/彼女らは、内地にいれば得られにくかったような階層出身のひとたちですが、それが専門的な資格を満洲で獲得し、専門職として働く場を得たわけです。これらは、植民地的特権を生かしての近代的な資格を獲得した例でしょうか。彼らは、団経営や地域生活に欠かせない人材として開拓地の近代化に必要な人材となっていったのです。

#### 4) 階級関係と民族関係と

先ほどから繰り返し述べていますように、満洲移民は自作農主義を理想としていました。しかし、結果として自作農から地主へと転じました。自作農として中国人農民や朝鮮人農民との「農民同士の友好的関係」を構築することが期待されていたわけですが、言うまでもなく、多くの場合が日本人地主と中国人小作農民・朝鮮人農民小作・苦力労働者という関係になりました。つまり、中国人農民や朝鮮人農民に寄生した日本人地主という関係が出来てしまったわけです。民族関係と地主小作関係とう階級関係の二重の関係が重複してしまいました。元満洲移民にインタビューしますと、「われわれは中国人農民とも朝鮮人農民とも関係がよかった」と述べる場合が少なくないのですが、それはこのような地主小作という階級関係と、民族的な支配被支配関係の上に成り立つものであったという自覚が少なかった、といえましょうか。

## 5) 開拓生活の成否の分かれ目

北米や南米のプランテーションに農業労働力として移民したひとたちに比べると、初めから自分の広大な土地、しかも既耕地を持ちながらの開拓生活は比べようもないでしょう。ですが、厳しい寒さや土壌の差、農業技術の違いなどの環境の変化に適應する困難は共通するものがあつたと思えます。

しかし、入植から時間がたつと、地元への定着度が高まり、農業経験も蓄積され、農民層階層分解が進んで、小作として出しながらも自立できる農家經營を行えるひとたちや開拓団が登場してきます。それは、多くは開拓団指導者の力量、土地の肥沃さ、都市への近接性などの立地によっていたようです。

たとえば、首都の新京(現長春)の成長に伴うその都市近郊に入植した開拓団などは、蔬菜園芸の指導者が入植し、大消費地を控えていたために、農業經營は数年で軌道に乗っていたようです。他方で、一般の開拓地では、農業収入よりも木材資源への依存や、農産加工品の工夫や振興に大きく依っていたようです。このように、早期に入植したり、恵まれた条件の開拓地であつたりした場合には、それなりに軌道に乗っていたようですが、そうでない多くの開拓団での農業經營は大変難しかったようです。

その根本には地元農村との関係の構築がうまく行ったかどうかもありました。開拓団は生活物資も農業資材も満洲拓殖公社を通じて購入し、農産物販売もそこを通じてなされていました。その結果、開拓地では現金がいらなかった、と言われます。そのために、地元のひとたちとの関係性は希薄でした。生産も生活も開拓団内ではほぼ完結し、学校も日本人の国民学校があり中国人の学堂と別々でした。すなわち、開拓地は日本人コロニーと化していたのです。唯一、農業労働者の雇用、地主小作が開拓団と地元農民との間で構築された関係でしたが、それは非対称的なもので、関係性は単純ではありませんでした。その結果、差別的で植民者として

の特権にあぐらをかいたひとたちはじり貧となりますが、その一方で地元との関係や雇用した地元農民との関係に配慮し、対等で真摯な関係を構築していったひとたちは、地元の理解と支持を少しずつ得ていったようです。

## 6) 植民地都市生活者との比較

満洲では、大連などの古くからの植民地都市に住んでいた日本人たちは、ほとんどがホワイトカラー層と中小商工業者で、近代的な植民地での恵まれた生活、植民者としての特権を十分享受した日々であったと言われます。しかし、農村での農業移民たちは生活環境の劣悪ななかで、広い土地は持てたけどそれを有効利用できずに、苦闘した日々であったと言うことが出来ましょう。すなわち、満洲の日本人都市生活者は、植民地の近代的生活を謳歌するのに反し、開拓団の生活は、大土地所有という特典だけで、しかもそれも十分生かすことが出来ないものでした。

# 5. 敗戦体験とその後のライフコースー引揚げと「中国残留」と

## 1) 1945年8月9日以降の日々

1945年8月8日のソ連軍の侵攻に伴い、その多くがソ満国境という辺境の開拓地に暮らしていた日本人開拓民は、「避難命令」とともに大半の開拓団は開拓地を脱出し、ハルピンや「新京」(現長春)などの大都市へ向けて避難していきました。ソ連軍や中国の「匪賊」から逃れるために山中をしかも夜間の行軍をおこなったために、それは多くの犠牲者を出す「死の逃避行」となったのです。

そもそも、関東軍や満洲国を後ろ盾とし、入植地の強制買収や強制立ち退きなどの強権的な入植の経緯などによって、日本人開拓民は地元の中国人農村や朝

鮮人集落から孤立しがちでした。そのうえ終戦間近に行われていた農作物の供出制度や勤労奉仕にたいする中国人農民の反感はたかまっており、彼らの真ん中に住む日本人開拓民はそのような植民地的支配への彼らの敵意や反感の矢面に立たされたわけなのです。

開拓団のリーダーで家族の柱であった約4万7千人の男たちが「根こそぎ動員」され、ソ連軍が侵攻し、植民地的状況で敗戦を迎え、満洲国も崩壊し、そして国民党と共産党の内戦が再開するという「五重苦」のなかで、開拓団員のほとんどは日本による満洲国支配のしっぺ返しを一身に背負い込み、そして難民化していきました。

## 2) 敗戦から引揚げまでの難民期

残留婦人などへの聞き取りや開拓団員が記した手記を見ますと、その2ヶ月におよぶ逃避行がほんの半世紀前に起こったこととはとても信じ難いまさに「生き地獄」であったことがわかります。たとえば、逃避行のなかで足手まといとなった子どもや老人や病人を置き去りにしたり、自ら手をかけて殺したり、川に放り込んだりして、自らが生きんがために逃げまどったのです。無政府状態のなかでの逃避行は、まさに生きるか死ぬかという「死と生が隣り合わせ」の日々でした(蘭、1994)。

戦乱のなかで無政府状態の2ヶ月が過ぎ、10月には治安がある程度回復し逃げ惑った人たちも収容者に収容されていったんは安堵しますが、迫りくる寒さと食糧難と伝染病の蔓延によって、再び「死と生が隣り合わせ」の状況に陥り、収容所のなかには「死が日常化」した状況へと化していきました。ちなみに、応召された約4万7千人の男性を除く全開拓団関係者22万人のうち約8万人(36%)にのぼる人たちがこの半年あまりの間に死亡したといわれています。

難民化した日本人農業移民たちは、多くは大都市の収容所に収容され、初期は日本人居留民会による支援で大いに助けられました。しかし、居留民会もソ連軍

による暴行や掠奪等で自分たちを守るのが精一杯となり、その後は、避難民と化した日本人満洲移民たちは、体力のあるものたちは日雇いや雑業などで糧を得るか、ソ連軍の駐屯地近くでのゴミ拾い等によって生き延びるかしかなかった。しかし、病気になった人、助ける人が誰もいない弱者たちは、死を待つか、誰かを頼って生きるしかなかったのです。

この絶体絶命の状況を乗り切るために中国人農家の世話になるしかない人たちが大勢生じ、約3万人を超える人たちが中国人家庭に入ったといわれています。このような極限状況下で、自分自身と子どもを守るために、現地の中国人に子どもを頼んだり、売ったり、生き別れたり、奪われたりして残された満洲移民の子どもたちこそが、「中国残留日本人孤児」なのです。

### 3) 集団引揚げか、中国残留か

翌1946年5月、集団引揚げが始まりました。中国人農家に身を寄せていた多数の日本人女性も引揚げました。この集団引揚げは、東北をめぐる国民党と共産党の内戦下でそれを有利に戦うための国民党とアメリカの協力の下に行われました。当初日本人の現地定着を望んだ日本政府も、満洲における日本人の状況は悲惨であることがわかると、GHQに何度も陳情し、ついに米国が国共内戦の作戦と人道的な立場から、この日本人の引揚げを実現させたのです。

この集団引揚げ事業は、前期集団引揚げと後期集団引揚げの2回に分かれて行われました。前期は1946年5月から1949年までで、この期間に満洲の日本人は大半が帰国しました。この期は国共内戦が終結し東西冷戦が始まりだし、引揚げを担ったアメリカの中国からの撤退、等によって中断されました。後期は中国側の呼びかけによって赤十字など民間団体の話し合いによって、1953年に再開されましたが日中関係の悪化によって1958年に終結しました。前期に引揚げられずに残ったひ

とたちも、ほぼこの期に帰国しますが、この期の最後のチャンスに帰国を諦めた女性たちがいました。この後、1972年に日中間の国交が正常化するまで中国への残留を強いられた女性たちこそが「中国残留婦人」となったのです。約1万人の残留婦人と残留孤児とが中国への残留を強いられたと推計されております。

以上から明らかなように、満洲の日本人移民たちは、同じような戦後を送ったわけではありません。集団引揚げは満洲の日本人のライフコースをわける大きなターニングポイントとなりました。すなわち、(a)集団引揚者、終戦直後に集団引揚げで帰国したひとりと、(b) 中国残留者、中国に「残留」し国交回復後に帰国してきたひとりと、そして、(c)いまだに中国に「残留」し続けるひとりと、の3つのタイプでした。ここでは、(a)集団引揚者と(b)中国残留者を取りあげて比較していきます。

## 6. 想起される「満洲」 `想起される「日本」

### 1) 集団引揚者の戦後経験

集団引揚者は、終戦直後に命からがら祖国に引き揚げ、いったんは本籍地・母村に戻りました。そこで、ゆとりがあれば落ち着きました。ですが、基本的には戦後の食糧難のなか親兄弟や親戚の世話になるにも限度があり、恵まれたひとたちはそこに残ったり分家したりしましたが、多くは母村を出て戦後1946年から始まった戦後緊急開拓政策にもとづいて国内入植地に入り、文字通りの開拓生活を始めます。そこに定着するひとたちは少なく、定着率は50%にも満たなかったようです。というのも、国内開拓地は、山里離れた国有山野や飛行場などの国有地であったために、農業経営には難しかったからです。戦後の引揚げ直後はそこで糊口を凌ぎ、社会全体に経済的ゆとりが出てくると、高度成長期の労働力不足に乗って都市で

の職場に移動しています。

満洲からの集団引揚者たちは、「人生で一番苦しかったのは満洲からの引揚げた後の国内での生活だった」、とよく言います。満洲から内地に引揚げるまでは「生きて帰れるか」という心配がもっとも大きな課題でしたが、命からがら引揚げてきた後の郷里での日々は、命の心配はする必要はなくなったが、生活苦にあえぐだけでなく、満洲体験が理解されなかったこと、さらには引揚者への白眼視や差別がとてつらかったといえます。「せっかく生きて帰ったのに、祖国は冷たかった」、引揚げの際の悲劇を話しても、「植民地でさんざんいい思いをしておきながら、何をいまさら泣き言を言うのか」など、体験を理解されないことによる精神的な苦痛があったといえます。したがって、内地の郷土での生活よりも、体験を理解しあえる同じ開拓団同士による不便な山のなかでの開拓生活を望んだ場合も少なくありません。さらには、1953年にブラジルが移民受け入れを再開すると、再びブラジルへと旅だったひとたちもいたのです。

集団引揚者は長らく満洲での体験を語ることを避けてきました。それは彼らの体験が周囲に理解されなかったことが大きいです。戦場での極限の体験も理解を絶しますが、時代によって戦争体験への注目は異なりますし、それは「お国のため」のものでもあったのです。しかし、満洲での体験は戦闘同様に極限状態であったにもかかわらず、それらは、強姦被害、子どもを捨てたり、売ったり、おいてきたり、殺したりした話であり、思い出すのもむごいし、いわんや一般に理解されるはずもないからです。それに、公的、私的な「語りの場」がないことも彼女ら彼らが語れなかったことの大きな要因だったのです。

したがって、彼らは戦後の日本で「ノスタルジアとしての満洲」を想いだし、心を慰めたのです。しかし、満洲を思うことは、同時につらい想い出を避けて通る訳にはいかないのです。満洲を想起することは精神的な苦痛をとまなうことです。ある集

団自決の現場で生き残った男性は、当時15歳で自決の場で自分たちも数人を殺して、自分も自決を試みたが生き返ってしまったという過去がありました。彼は、戦後ずっとこのことを語りませんでした。それは、同じ村内に死んでしまったひとたちの遺族がおり、話しても理解されないだろうし、互いに傷つけるだけだからだと思って沈黙してきたと言いました。しかし、残留孤児の肉親訪問で再会した老母がテレビで涙ながらに話しているのを見て、「このまま黙って死んでしまうわけにはいかない」と、語る決心をしたと言うのです(満蒙開拓を語りつぐ会、2005)。

このような過去は忘れ去ることが出来ません。でも、語ることも出来なかつたのです。そのようななかで満洲が想起されていたのです。口に出来ないような辛い思い出と、それ以前の夫婦水入らずの開拓生活、希望に満ちていた満洲入植期、という甘美な思い出とが錯綜した記憶こそが満洲の思い出なのです。

## 2) 中国残留者の戦後経験

私がインタビューしたある残留婦人も、1945年2月に夫が応召され、一人で幼い子ども二人をつれて戦乱のなかを逃げまどい逃避行をかううじて生きのびましたが、収容所で子どもを次々に亡くし、生きる気力をなくしており、「生きるため」に緊急避難として中国人家庭の世話になりました。ですが、1946年8月の所属する開拓団の引揚時には中国人の「夫」が妨害して引揚げ団に合流できず、1950年には長女を出産し、1953年の引揚げ時も長男を身ごもっていたために諦め、村には「日本人は一人だけ残った」といいます。そして日本の妹からの手紙でシベリアから帰った夫が実の妹と再婚したのを知り、「もう日本には帰れない」と断念し、帰国の最後のチャンスも見送らざるをえなかつたと言います。当初は「緊急避難としての結婚」であり、仮初めの生活であったはずのものが、このような経緯で帰れなくなり、ずるずると30年を超えて中国での残留生活を送らざるをえなかつたのです。

彼女の中国での残留生活は、一言でいえば「不安と孤独」に満ちたものであったと、語られました。「敵国人」として「偽満洲」の地で「一人きり」で生き抜く不安を拭うために、村の人たちに信用されようと努め、人一倍働きました。「ずっとひとりぼっち」だったと語られる深い孤独感は、心のなかの祖国と目の前の子どもの成長によって支えられ、中国農村社会での貧農の生活に「適応」していかざるをえなかったのです。しかし、不安と孤独感は拭えず、ノスタルジアとしての故郷の山川、祖国日本そしてただひとりの夫との開拓生活が繰り返し回想され想像されていくのです。「地続きだったら違ってでも帰り」たかったし、中国でただひとり心を許していた娘には「死んだら松花江に流してくれ。川をつたって日本海に流れ込み、そこから流れて日本に帰れるから」と頼むほど望郷にくれていたといいます。

集団引揚げが中断され、残留邦人たちは次第に中国社会に適応していき日常では問題はほとんどありませんでしたが、子どもたちの進学や就職など人生の節目での差別を感じていました。それに、戦後うち続く政治運動の度に批判され、とりわけ1966年から76年の文化大革命期には「敵性外国人」として苦境に立たされたといえます。一部の農村部では文化大革命の影響はそれほど強くないところもありましたが、都市部を中心に文化大革命の嵐は吹き荒れ、残留している日本人とその家族は厳しく指弾され、残留邦人、とりわけ残留婦人の望郷は強まっていったといえます。

このような中国残留者にとっての思い出は、日本にまつわる思い出です。その残留の経緯を聞くと、その思い出が理解されます。ソ連参戦後の逃避行が過ぎ、収容所での生活は死と隣り合わせのものであり、自分が、あるいは家族が生きるためには働いて自活するか、中国人家庭に世話になるか(嫁になるか、妾になるか)しかなかったのです。3万という多くの日本人満洲移民が中国人家庭に世話になりましたが、1946年以降の集団引揚げ時には、他の日本人と一緒に帰国したひとたちが少なくありませんでした。しかし、その時に中国に残ることを選ばざるを得なかった人々

ちがいます。それは、子どもが生まれており、その子を残しては帰れないという母親として残ったひとたちでした。祖国と子どもを両天秤に駆けるという難問のまですべての彼女たちは苦しみに苦しみます。ある女性は、帰るつもりだったが子どもに泣かれて断念した。しかし、チャンスを逃した後、悲しみでしばらく寝込んでしまったと。それから、帰国を諦めて中国での生活を受け入れていった、と言いました。母として子どもを選んだという語りは、いわば「母の語り」といえましようか。

ほとんどの中国残留婦人は、中国残留の経緯を語るときに涙を流しますが、さらにその後の中国での生活で、「日本を思わなかった日は一日もなかった」と訴えます。そして、「帰れるようになったから帰国したのではなく、帰国をずっと思わない日はなかった」とも訴えます。現実の生活が苦しければ苦しいほど、周囲のなかでの孤独が深ければ深いほど、心の拠り所としての遠い祖国へと向かわせるのです。

もちろん、すべての残留婦人が同様であったとは言えないでしょう。それは、彼女らが住んだ地域によって、働いた職場によって、結婚した夫によって、あるいは夫の家族・親族によってどのように受け入れられていったかで、中国での生活(孤独や差別)は異なってきます。すなわち、極端に言えば、家族や地域や職場に受け入れられたひとと、差別されたり、文化大革命期に迫害を受けトラウマとなったりしたひとにわかれます。これらの経験の違いによって、想起される記憶は異なってきます。つまり、地域社会や家族の受容の程度によって、つまりそのひとの生きられた状況によって日本人であるということが異なる意味を持っていたのです。

日中の国交が正常化(1972年)して以来、多くの一時帰国者と永住帰国者がいました。そして、日本社会へ向かって、多くのひとたちが訴え続けていますが、それらは「祖国に訴えかける物語」となっていました。しかし、それは2002年の国家賠償訴訟をきっかけとして「祖国を訴える物語」に変わっていきまますが。ここでは、これ以上触れません(蘭、2007・2008a)。

## 7. 記憶の語りを聞き取ることの意味

### 1) 経験を知ること

満洲での体験や戦後の引揚体験や中国残留体験や日本への帰国体験を聞き取ることは、どのような意味があるでしょうか。それは、基本的には、日本人満洲移民の満洲移住前後から今日までの様々なライフコースや、ライフストーリー(生活史)を知ることです。そして、同時に彼女(彼)らのライフストーリー(人生の物語)を知ることでもあります。といいますのも、私たちは、日本人満洲移民の体験談を聞きとる際に、基本的には満洲に移住することによって、それ以降規定された満洲での体験から、戦後体験、そして今日までの人生をすべて対象とする聞き取りとなっています。単に、満洲移民期を対象とするだけではありません、これが私たちの研究が従来の歴史的な研究と異なる点です。

それに、彼女(彼)らのライフストーリー(人生の物語)を聞き取ることは、彼女(彼)らの人生がどのように展開したのかというライフストーリーによって、日本人満洲移民のひとり一人の小文字の歴史を知ることを意味します。また、彼女(彼)らのライフストーリー(人生の物語)を聞き取ることは、ひとり一人の小文字の人生(歴史)がどのように生きられたかを知ることです。どのように生きられたかとは、その人生で体験されたひとつひとつの出来事の綴りだけではなく、それらへの想いであり、感情であり、今からふりかえっての評価でもあります。

歴史的事実とひとり一人が生きられた小文字の人生とを摺り合わせて新しい歴史を求めただけでなく、それをどのように生き、どのように感じ、どのように評価し、どのように語られるか、が問題なのです。これが私たちの研究が従来の歴史的な研究と異なる点です。

## 2) 記憶の語られ方

また、満洲体験などをどのように生きられ、どのように感じられ、どのように評価され、どのように語られるか、が問題なだけではありません。満洲移民に関わったひとたちの記憶の語られ方は、「否定された満洲」にかかわった自己の人生を戦後日本社会のなかで、どのように位置づけ、解釈しているのかが大きなポイントとなります。他方で、中国残留の語られ方は、「否定された満洲」にかかわった自己の人生を解放後の中国社会のなかでどのように位置づけ、解釈してきたのか、そしてそれを一時帰国や永住帰国後の日本社会のなかでどう語るのか(あるいは中国社会でどう語るか)、です。どちらも、「否定された満洲」にかかわった自己の人生が戦後にどのような意味を持ち、それをどのように語るのかという難しい問題を孕んでいます。たんに、満洲はああだった、集団引揚げはこうだった、あるいは、中国残留はああだったと語るだけではないのです。

さらに重要な点は、語り手自身がどう感じたかとともに時代の歴史観のなかでそれをどう語るかです。たとえば、中国残留者の語りは、集団引揚げ者の記憶の語りのなかに反映された戦後日本の満洲観を喝破することがあります。そのことは、体験の違いだけでなく、それが解釈される場の違いと言うべきでしょうか。これは非常に大切な点だと思います。

私は、聞き手と語り手とが向きあう場を「語りの場」、それを規定する時代状況などを「語りの磁場」と言っていますが、時代によって(「語りの磁場」)、語られる場(「語りの場」)によって記憶の語りが変化するのは当然だと思います。

たとえば、終戦直後には戦地から復員した兵士、外地から引揚げてきた引揚げ者、戦災被害にあったひとたちによる様々な戦争の語りが行われていました。そこには、終戦直後の生々しい体験を語る雰囲気、戦争の語りを共感して聞いてくれる聞き手という「語りの場」がありました。日本社会全体が戦争によって深い傷をおって

り、この傷をどのように癒すかを皆が模索しているなか、満洲での体験も戦争のひとつの体験として語る「語りの場」はあったでしょう。終戦直後の混乱のなかでマスター・ナラティヴもはっきりと指し示されず、「語りの場」を規定する「語りの磁場」も多様なモメントが働き、満洲体験者もその体験の語りが可能だったでしょう。

戦後改革の方向性が定まり、1952年にサンフランシスコ条約が締結され、東西冷戦体制のなかに組み込まれ、戦後処理が進み、高度成長を向かえて「もはや戦後ではない」と語る頃、語りの場を規定する「語りの磁場」のモメントは一元化されその力は強まってきたと判断しています。その中心には、先に挙げました「否定された満洲」、「批判される満洲体験」というマスター・ナラティヴがあったのです。この満洲が批判される文脈のなかで、満洲体験の記憶の語りはなされていったと考えています。

また、中国残留婦人が日本で日本人に向かって語るのか、中国で中国人に向かって語るのか、残留婦人や孤児の2世や3世に向かって語るのかによって、語り方が違うのは当然でしょう。つまり、聞き手の立ち位置、語り手の立ち位置によって、語り方は異なるからです。では、輻輳する幾つかの語りはウソで信頼できないものなのか、と言うとそれはまた違うのです。端的に言えば、それらはそれぞれ「本当」なのでしょう。私たちだって、誰に向かって同じような語りをするかという、そうではありません。時と場所と状況によって語りは違ってきますから。

そこで、語りの場がどのようなもので、語りの磁場がどのようなもので、モデル・ストーリー(model story)やマスター・ナラティヴ(master narrative)との関係をも含めて考察することによって、記憶の語りの構造と、そこにある論理と心情、すなわち満洲、満州移民、中国残留をめぐる「記憶の政治学」を明らかにできるのではないかと考えています。

## 8. 結びにかえて

### 1) 戦後日本社会の「語りの磁場」

総力戦への敗戦という体験が、戦後日本社会の方向性を規定しました。アジア太平洋戦争への敗北による戦前的なるものへの反省がその基調にありました。台湾、朝鮮、満洲などへの植民地支配への反省、軍部ファシズムへの反省が規定にありました。満洲に関して言えば、「否定された満洲」ですし、満洲移民に関して言えば、「帝国主義の尖兵としての満洲移民」です。しかし、周知のように、そこには「記憶の裂け目」がありました。端的に言えば、「悪い戦争」への反省と、「仕方がなかった戦争」という言い訳(あるいは開き直り)です。

戦後体制のなかでつくられた「戦争の記憶」は、「国民的想像力」(白石隆)としての「悪い戦争」であり、「否定された満洲」であり、集団的忘却としての中国残留日本人でした。しかし、戦後体制の変動のなかで、「歴史の再審」が提起され「悪い戦争」への反省と、「仕方がなかった戦争」という言い訳とがぶつかり合ってきました。そこには、いわば「記憶の裂け目」がありました。その裂け目のなかで戦後日本社会の満洲や満洲移民にかんする記憶の語りは揺れてきたように思います。

### 2) 「否定された満洲」に係わった体験の解釋

坂部晶子が指摘していますように、満洲に関する記憶の語りは、満洲国のエリートや官僚たちによる五族協和・王道楽土という理念からの「満洲国は理想国家」だったという語り、技術者たちによる近代主義的な語り、都市住民による「ノスタルジアとしての満洲」という語り、そして農業移民による「逃避行の語り」があり、それぞれの語りのパターンが異なるだけでなく、それぞれの語りの関連について明らかにされています。坂部は「満洲国は理想国家」という語りを柱に、それぞれの語りが補完

的な関係を持つことを喝破しています(坂部、2008)。すなわち、「否定された満洲」というマスター・ナラティブに対して、元満洲国のエリート層は「満洲は理想国家だった」という戦前の満洲帝国時代のマスター・ナラティブを引っ張り出して、対抗的なカウンター・ナラティブを提示してきました。さらには、ホワイトカラー層は「モダンな満洲」という近代主義・開発主義を肯定的に語り、都市の居留民たちはモダンな生活から「ノスタルジーとしての満洲」を、そして農村の農業移民が「逃避行の語り」を主に語ります。

それらは、戦後社会にとってどのような意味を持っていたのでしょうか。「否定された満洲」というマスター・ナラティブへの言い訳なのか、対抗なのか、そこからの逃避なのか、被害を訴えて社会の同情を得ようとするのか、様々な意味がこめられているでしょう。ここには、満洲に関わったひとたちと、それ以外のひとたちの間に、満洲をめぐる「記憶の裂け目」があるのです。そして、この裂け目は、じつは、底流において戦後の日本社会の満洲、植民地支配、そしてあの戦争に関する割り切れない意識へとつながっているのです。

しかし、繰り返しますが、それらがいずれも「否定された満洲」「批判される満洲体験」というマスター・ナラティブを意識して語られたものなのです。

満洲体験と一口にいても、それは様々です。満洲農業移民に限定しても様々な側面があります。いわんや、満洲における立場、階層、居住地によって、それは大きく異なっていました。そのことを坂部は鋭く指摘し、それぞれの記憶の語りを類型化したのです。このあるグループにおける定型化された語り、たとえば「満洲国は理想国家」だったという語りや、「満洲はよかった」という語りや、ある集団のひとつの語りの雛形(モデル・ストーリー)として共有されてきました。

### 3) ふたつの「記憶の裂け目」

戦後日本社会のなかの満洲、満洲移民をめぐる「記憶の裂け目」とともに、もうひとつ注目すべきものがあります。つまり、集団引揚者による満洲体験と中国残留者による中国残留体験というふたつの記憶の語りが照らし合わされた時、そこには語りのなかの対立や矛盾が露呈されます。それは、中国残留体験のなかで思い知らされた中国社会にとっての満洲国、日本人満洲移民なのです。これは中国共産党による公式的見解(マスター・ナラティブ)だけでなく、地域社会で語られるモデル・ストーリーであり、地域生活のなかでのひとびとの率直な想いでもあったのです。それらの中国東北の地方社会のなかで規定された中国残留者の記憶の語りと、戦後日本社会で生きられた集団引揚者の記憶の語りつぶつかり合うことは、ある意味で当然であったと言えましょうか。これは、戦後中国社会と戦後日本社会の「記憶の裂け目」でもあったからです。ふたつをつき合わせることで、両方の記憶の語りの構造と社会的文脈の違いが明白になり、「記憶の語り」に関わる記憶の政治学が解きほぐされるのです。

### 4) おわりに

最後に、戦争体験をいかに伝えるか、あるいはいかに聞き取るかは、このような屈折した体験、屈折した想い、記憶の裂け目を、いかに掬い取るかでしょうか。自分のイデオロギーで相手を切り捨てるのではなく、そのひとの立場になり、そのひとの心のひだにわけいってこそ、体験者でないとわからない、あるいは体験者でも理解できない、屈折した体験、屈折した想いをはじめ聞き取ることが出来るのではないかと考えています。

個人や集団レベルでは大きなインパクトがあった満洲体験の記憶の語りも、それが社会レベルで考えますと、まさに満洲をめぐる記憶の政治学の様相と化します。

個人の語りの持つ「語りの力」と、マクロなレベルでの「語りの磁場」、記憶の政治学によって体験の記憶の語りは規定されざるを得ません。ひとり一人の記憶の語りは、もちろん自身の原体験によっているのですが、その語りは自身の原体験のみによって形成されているのではなく、むしろ、モデル・ストーリーやマスター・ナラティブによって規定されていますが、しかしながら、それを突き破るような語りが時々出てくるのです。

また、体験についての記憶の語りを聞き取るという実践は、まずは、その体験をはじめて知ることによって様々なエネルギーが生みだします。しかし、その実践のなかで、聞き手だけが変化するのではなく、語り手も変化することは重要なことです。というのは、体験についての記憶の語りを聞き取るという実践は、語り手と聞き手の相互作用のなかでなされますから、モデル・ストーリーにそって語っていた語り手が、聞き手の予想外の質問によって、自己のなかのモデル・ストーリーに反するような記憶の語りが想起され、語られることがあるからです。この語りのなかの矛盾によって、語り手は今までの語りのもとに抑圧されていた記憶を思いかえし、新たな記憶の語りを紡ぎ出すことが可能だからです。そして、それが、モデル・ストーリーやマスター・ナラティブを突き破り、従来の記憶の政治学に大きなインパクトを与えることになるのです。研究者が記憶の聞き取り実践を行う意味はここにあるのではないかと考えています

主題語: 満洲移民, 満洲 記憶, 満洲 経験, 生活世界

투고일: 2010년 9월 10일, 심사개시일: 2010년 9월 25일, 게재확정일: 2010년 10월 15일

## 参考文献

- 蘭信三[1992] 「ある中国残留婦人のアイデンティティをめぐって」 戦時下日本社会研究会(編) 『戦時下の日本—その歴史社会学的考察』 行路社
- [1994] 『「満州移民」の歴史社会学』 行路社
- (編)[1998] 『「中国帰国者」をめぐる地域社会の受容と排除に関する比較社会学的研究』 平成7~9年度科学研究費補助金基盤研究(C)(1)研究成果報告書
- [2000a] 「満州移民研究における社会学的方法の可能性」 『社会情報』 ~Vol.9, No.2(札幌学院大学社会情報学部)
- (編)[2000b] 『「中国帰国者」の生活世界』 行路社
- (編)[2002] 「満州移民の問いかけるもの」 『環』 ~vol.10 藤原書店(藤原書店(編)[2004] 『満洲とは何だったのか』 藤原書店) に再録)
- (編)[2003] 『「中国帰国者」の適応と共生に関する総合的研究』 平成12~15年度科学研究費補助金基盤研究(B)(1)研究成果中間報告書
- (編)[2004] 『中国残留孤児の過去、現在そして未来—シンポジウム参考資料』 ~平成16年度~18年度科学研究費補助金基盤研究(B)(1)シンポジウム参考資料
- [2005] 「本当の「出会い」必要」 『信濃毎日新聞』 ~2005年5月29日
- (編)[2006] 『中国残留孤児の過去、現在そして未来—残留孤児問題の総括と展望』 平成16年度~18年度科学研究費補助金基盤研究(B)(1) 研究成果中間報告書
- [2007] 「中国 「残留」日本人の記憶の語り—語りの変化と「語り」の磁場をめぐって」 山本有造(編) 『満洲 記憶と歴史』 京都大学出版会
- [2008a] 「戦後日本社会と満州移民体験の語りつぎ」 濱日出夫(編) 『戦後日本社会における市民意識の形成 戦争体験の世代間継承』 慶應義塾大学出版会
- (編)[2008b] 『日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学』 不二出版
- (編)[2009] 『中国残留日本人という経験—日本と「満洲」を問い続けて』 勉誠出版
- 蘭由岐子[2004] 『「病の経験」を聞き取る—ハンセン病者のライフヒストリー』 皓星社  
中国帰国者支援・交流センター(編)[2005] 『二つの国の狭間で 中国残留邦人聞き書き集 第1集』 同センター
- 趙彦民[2004] 『日本社会における「中国帰国者」に関する考察—「中国残留孤児」とその家族の生活史を中心に』 ~名古屋大学大学院国際協力研究科2003年度修士課程学位論文
- 江畑敬介・曾文星・箕口雅博(編)[1996] 『移住と適応—中国帰国者の適応過程と援助体制に関する研究』 日本評論社

- 江成常夫[1988]『シャオハイの満洲』新潮社
- 呉万虹[2004]『中国残留日本人の研究』日本図書出版センター
- 反差別国際連帯解放研究所しが編[1995]『語りのちから一被差別部落の生活史から』文堂
- ホルスタイン, ジェイムズ&グブリン, ジェイバー(山田富秋ほか訳[1995=2004]『アクティヴ・インタビュー』せりか書房
- 伊地知紀子[2006]「解放直後・在日済州島出身者の生活史調査」『日本オーラル・ヒストリー研究』第2号
- 加藤陽子[1995]「敗者の帰還ー中国からの復員・引揚問題の展開」『国際政治』第109号。
- 木村健二[1989]『在朝日本人の社会史』未来
- [1994]「日露戦後海外農業移民の歴史的位置」安孫子麟編著『日本地主制と近代村落』創風社
- [1993]「在外居留民の社会活動」『岩波講座 近代日本の植民地 5 膨張する帝国の人流』岩波書店
- 小峰和夫[1999]「資料紹介『満洲紳士録』への社会移動論的アプローチ」『日本植民地研究』第11号
- 小関隆[1999]「コメモレイションの文化史のために」阿部安成ほか(編)『記憶のかたち』柏書房
- 厚生省援護局(編)[1977]『引揚げと援護 三十年の歩み』厚生省
- 厚生省援護局(編)[1987]『中国残留孤児』ぎょうせい
- 京都「自分史を書く会」(編)[2004]『落日の凍土に生きてー「我是誰」中国残留孤児の証言』文理閣
- 満蒙開拓を語りつぐ会(編)[2003]『下伊那のなかの満洲 聞き書き報告集1』飯田市歴史研究所
- (編)[2004]『下伊那のなかの満洲 聞き書き報告集2』飯田市歴史研究所
- (編)[2005]『下伊那のなかの満洲 聞き書き報告集3』飯田市歴史研究所
- (編)[2006]『下伊那のなかの満洲 聞き書き報告集4』飯田市歴史研究所
- (編)[2007]『下伊那のなかの満洲 聞き書き報告集5』飯田市歴史研究所
- (編)[2008]『下伊那のなかの満洲 聞き書き報告集6』飯田市歴史研究所
- (編)[2009]『下伊那のなかの満洲 聞き書き報告集7』飯田市歴史研究所
- (編)[2010]『下伊那のなかの満洲 聞き書き報告集8』飯田市歴史研究所
- 《満洲泰阜分村七〇年の歴史と記憶》編集委員会(編)[2007]『満洲泰阜分村 七〇年の歴史と記憶』不二出版
- 本島和人[2006]「満洲体験者と市民の出会いー地域で満蒙体験を語りつぐこと」『日本

オーラル・ヒストリー研究』第2号

- 小川津根子[1995] 『祖国よー「中国残留婦人」の半世紀』 岩波書店  
岡部牧夫[2002] 『海を渡った日本人』 山川出版会  
ポール・トンプソン(酒井順子訳)[1978=2002] 『記憶から歴史へーオーラル・ヒストリーの世界』 青木書店  
坂部晶子[2008] 『「満洲」経験の社会学』 世界思想社  
桜井厚[2002] 『インタビューの社会学』 せりか書房  
スターケン, マリタ(岩崎稔他訳)[1997=2004] 『アメリカという記憶 ベトナム戦争、エイズ、記念碑的表象』 未来社  
高橋朋子[2009] 『中国帰国者3世4世の学校エスノグラフィー』 生活書院  
高橋泰雄[1997] 『昭和戦前期の農村と満州移民』 吉川弘文館  
塚瀬進[1998] 『満洲国ー「民族協和」の実像』 吉川弘文館  
上野千鶴子[1998] 『ナショナリズムとジェンダー』 青土社  
山崎豊子[1991] 『大地の子』 新潮社  
山田昭次(編)[1978] 『近代民衆の記録 6満州移民』 新人物往来社  
山本慈昭[1981] 『再会ー中国残留孤児の歲月』 日本放送協会  
山本有造(編)[1993] 『「満洲国」の研究』 京都大学人文科学研究所  
山本有造(編)[2007] 『満洲 記憶と歴史』 京都大学出版会  
山室信一[1993] 『キメラー満洲国の肖像』 中央公論社  
柳沢遊[1999] 『日本人の植民地経験 大連日本人商工業者の歴史』 青木書店  
読売新聞大阪社会部(編)[1986] 『満蒙開拓団』 角川書店  
読売新聞大阪社会部(編)[1982] 『中国孤児』 読売出版社  
若槻泰雄[1991] 『戦後引揚げの記録』 時事通信社